

ころじゃなかった。川沿いに登って来た林道と周辺の山の木々しか見えない。

けれど、その橋から振り返って見た川は最高だった。

ごつごつした岩の間を水が流れ、浅いところ、淵のところ、流れが急なところ、ゆるやかなところなど、それはとてもバラエティにとんでいた。

向かいの山には小さい滝も見えた。ずっと上流の方だけ、この川に落ちる滝だと思わずごく気分が良かった。『ぼく、ここからの風景を描くよ』

お母さんにそう言って、期待したよりも素晴らしい題材にめぐり会えたことを喜んだ。あのととき、お母さんは日傘を差して、ずっとぼくに付き合ってくれていた。

あれから三年後に、この町を引っ越すことになるとは、夢にも思わなかった。

良平を乗せたバスは山の傾きに合わせて上を向く。すると自然と雲が見える。くねくねした道に合わせて、川を左に見ながら右に見ながら、そのつど雲はまるで二つの空があるみたいに入れ替わる。

バスを降りて、橋に向かって歩いた。三年前も夏だったから、何となく舞いもどった感じだ。こういうのを何というんだらう。やっぱり懐かしいっていうのかな。いや、さみしいっていう方があっていいな。

空を見上げると、さっきの雲はもうどこにいったのか全

然分からなくなっている。

橋まで来て、すぐ下を見た。川はもとのまま流れている。いくつかの大きい岩は、前もそこにあったかどうか思い出せない。あんなに一所懸命に描いたのにと、あの頃の自分を思い出して笑った。

雲も岩も全然ちがうものだけれど、なんかすごく似ている。そう思えば、楽しい。

遠くを見ながら深呼吸をした。そして、あのとときを思い出して滝の下にゲンコツを当ててみた。

「お母さん、この水筒のコップに早く水を入れて」

「良ちゃん、何やってるの」

「あの滝の水をコップに受けて飲むんだよ」

「はいはい、冷たい滝の水ね」

あのとときは暑かったから、その水はとてもおいしかった。本当に滝の水を飲んだような気分がした。

「お母さん、何で山の上からあんなに水が流れてくるの」

「何でかしらねえ」

「ぼく、あの山に行ってみよう」

その写真画は、今お母さんの病室に飾ってある。この前、電話で聞いて久しぶりにその絵のことを思い出した。

「殺風景だから、良ちゃんの絵はとってもいいわよ」

あの一言で、ぼくの時間はだいぶ後もどりました。ずっと先々、大人になってから思い出すことが今になったみたいだ。